



本丸のあった高台の部分



現在の浅瀬石城跡の碑と侍屋敷の場所

るとき、参考にしてください。）

お城は、殿様のいる本丸や武器蔵などの必要な建物もとつていきました。また、家来の侍たちが住む屋敷の場所や町人たち・農民たちの住む場所もあり、多くの人たちが住んでいました。

お城のあったところは、浅瀬石川の対岸にある黒石は、まだ小さい村でしたから、黒石の村の人たちは、みんな浅瀬石の町に買い物にきたということでした。浅瀬石は、周辺の地域の中心地であったのです。

《「浅瀬石」と記されるのは、万治二年（一六五九年）からで、お城のあったところは「汗石」でした。お話は「浅瀬石」を用いて続けます。》

(二) 浅瀬石の隆盛を築いた城主 — 千徳大和守政氏

永禄四年（一五六一年）ころ、浅瀬石十代めの城主になった千徳大和守政氏は、とても強い殿様でした。政氏は、津軽藩祖の大浦為信という人と津軽を統一することについて盟約を結び、それまで津軽を治めていた南部方を相手に、為信の盟友として共に

戦いました。

為信ためのぶが南部方なんぶがたの平賀の大光寺城だいこうじじょう（城主滝本重行）を攻めたときも、為信の応援に三百人くらいの兵を率ひきいて戦いに参加しました。大光寺城は落城らくじょうし、城主の滝本重行は南部に去って行きました。その後も為信に協力して南部方を攻めました。

天正十三年（一五八五年）四月、まだ残雪ざんせつのあるところに津軽つがると南部なんぶとの間に大きな戦いが始まりました。津軽を支配しはいしていた南部の勢力が、しだいに失われていくようになったため、これを怒った南部方では、二手ふたての大軍たいぐんで津軽に攻めてきたのです。

その一方の軍は、名久井日向守なくいひゅうがのかみを総大将とした三千人あまりの軍勢ぐんせいでした。八甲田山を通り黒森山くろもりに出て、浅瀬石あせいしを攻撃こうげきするため黒石村くろいしの東にある宇杭野うくいのという野原に陣じんを構かまえました。

浅瀬石の城にいる兵は三百人くらいです。攻めせてきた南部の軍勢ぐんせいから見ると、十分の一ほどの数よりありませんでした。でも、城主の政氏まさうじは豪気ごうきな性格ぐんりやくで軍略ぐんりやくにもすぐれていました。

領内りょうないの農民や町人を集めて、南部勢なんぶせいの攻撃こうげきを防ぐ兵ふせ（民兵みんべい）にしました。黒石の村からも働ける男や女が集められました。浅瀬石の町では、男は十

六歳の少年から六十歳のお爺さんまで、みんな兵になりました。また、女の人たちは若い娘たちも含めて働ける人たちが集められ、炊事がかりなどにあてられました。こうして集められた民兵は一千人ほどでした。浅瀬石も黒石も、滅ぶか生き延びることができるとかの瀬戸際であったのです。

城主の政氏は、攻撃を防ぐための武器や戦いの仕方など、いろいろな工夫をしました。

民兵たちに棒を持たせ、その先に鉈を結び付けさせて長刀にさせました。また、棒に鎌を結び付けて、敵の足を払うようにもさせました。竹や枝を用いて竹槍や木槍も作らせました。炊事がかりの女の人たちには、城のところでどころに大きな釜をすえて湯を沸かさせ、敵が攻め寄せてきたら湯を汲んでかけることにさせました。また、大きな石や大木なども用いて守りを固めました。

そして、みんなに棒の先に手ぬぐいなどをつけて旗を作らせ、準備していた旗に加えて城の隅から隅まで立て並べさせました。

宇杭野に陣どった南部勢は、その旗の数を見て城の中には大軍がいるものと思われました。それで、なかなか攻めて来れませんでした。そのうち、だんだん兵たちの食べるものも減ってきたので、名久井日向守は、謀りご



とで浅瀬石の城を落とそうと考え、塔堂外記という人を軍使として浅瀬石城に向かわせました。

昔は、どちらが敵側に軍使を出したとしても、「話し合うための使いの役目」でやって来るということで、軍使を攻撃しない、という戦いにおけるしきたりがありました。ですから、南部方の軍使は浅瀬石の城に入り、用事を済ませることができたわけです。

軍使が城の中に入り、びっくりしたこと。それは、大軍がいると思っていたのに、その大部分が町人や百姓の人たちであったことでした。用事を済ませて宇杭野の本陣に帰り、さっそくそのことを総大将に話しました。総大将の名久井日向守は、「それならば、ひと潰しに城を取ってやろう」として、三千の兵を三つに分けて三方から浅瀬石城に攻め寄せて来ました。浅瀬石側では、準備していた武器や工夫していた方法を上手に用いて防ぎました。そして、謀りごとを立て、敵の軍勢を用水堰の中に誘い入れたりして散々に打ち破りました。

このときのことです。政氏の家来に村上理右衛門という強い侍がいました。この人の三十歳くらいの妻は、自分の家で働いている下男や下女たち四、五人に棒や長い竿を持たせました。自分は小袖の着物を着て片腕を脱

ぎ、なめし革がわの野袴のばかまをはき、白い鉢巻はちまきをして小型ちようとうの長刀ちやうとうを持って戦いくいの支度したくをしました。そして一緒いっしょに、馬に乗った夫おっとの理右衛門りうえもんに従したがって戦いくいに出でました。

戦場せんじやうに出ると、宇杭野うくいのをめざして引きあげてきた敵きの騎馬武者きばむしや（馬に乗った兵）十数人と出会って戦いくいになりました。理右衛門りうえもんも妻つまも、下男げなん・下女げにょたちも、必死ひっしになって戦いくい、全部ぜんぶの敵兵てきへいを討うち取りました。理右衛門りうえもんの妻つまは小型せうがたの長刀ちやうとうを振り回まわして戦いくい、敵兵てきへい二人を討うち取りました。男おとこの人でも難むずかしいことなのに、女の身みではまれなこと、と言いわれました。

これと同時に、大炊之助おほいけのすけという下男げなんは、大きな棒ぼうで敵きの騎馬武者きばむしやを打ち倒たおしました。それを見た妻つまは、「その騎馬武者きばむしやは兜かぶとをかぶっているから、きつと敵てきの一方いっぺんの大將だいじやうに違ちがいない」と考かんえ、兜かぶとをつけさせたままままで討うちとれ、と言いい付けました。後のちでその騎馬武者きばむしやをよく見たら、兵へいの指揮しきに用もちいる采配さいはいを持もっていたそうそうで、一方いっぺんの大將だいじやうであつたことがはつきりしました。混乱こんらんする戦いくいの中で、よくそんなところまで氣きが付ついたものだ、とみんなが感かん心しんしたそうそうです。理右衛門りうえもん主従しゆじゆうは、すごい働はたらきをして城しろに歸かえりました。戦いくいは続つづき、三千人さんぜんあまりの敵兵てきへいは、わずか三百人さんぱくくらいくらいの浅瀬石勢せんせいせきせいと農民・町民のうみんの民兵めいへいに打ち破やぶられて、宇杭野うくいのに逃にげ歸かえりました。

理右衛門は、敵が逃げ帰っていく道筋を調べるために、浅瀬石の川原まで馬を進めました。ところが、そこには敵の兵がこっそり隠れていて、柳の木の下から鉄砲を一度に撃ちかけました。その一弾が理右衛門の股を打ち抜きました。重傷を負った理右衛門は、馬からどうっと落ちてしまいました。敵兵は理右衛門を討とうとして迫って来ます。そのとき妻は、すばやく理右衛門を抱き起こして馬に乗せ、早足で城に引きあげたので理右衛門は助かりました。しかも、引き上げる途中で、負けて逃げて来た敵の総大将と出会い、総大将の背につけている旗を奪い取って帰ったのでした。

浅瀬石勢は、知謀豊かで勇氣あふれる城主政氏の指揮に従い、兵も農民。町民の民兵も、理右衛門主従のように女も男も、一人ひとりが勇敢に戦い続けました。そして、上流の大雨で浅瀬石川が増水するとそれを利用したり、敵を不利な場所に誘い込んで破ったり、南部勢をさんざん悩ませました。

政氏から連絡を受けていた為信は、軍勢を率いて高木野（尾上高木）に陣を構え機会をうかがっていました。でも、ほとんど浅瀬石勢で南部勢を打ち破ってしまったのでした。

浅瀬石城攻撃がみじめな負け戦に終わった南部勢は、宇杭野の陣を解き、

浪岡なみのを通こって小湊こみなとをめざして逃げ去り、南部なんぶに帰かえって行いきました。

南部なんぶのもう一方の大軍たいぐんは、津軽つがるを攻せめるため別の道を進すすんで来ていたが、南部なんぶの地元じよんに不安ふあんが生はじ、途中とちゆうで引き返かえしていましたから、浅瀬石あせし勢せいの勝利しょうりはますます確たしかかなものとなりました。

このときの戦争を「宇杭野合戦うくいのがっせん」と言いいます。宇杭野うくいのというのは、現在の柵さくの木・東野添あづまのの地域ちいきを入れて牡丹平ふくたみ福民ふくたみあたりまで広がる場所、と言いわれます。そのころは野原のでした。浅瀬石城あせしは、高賀野たかかのの高台たかだいに建たち、金屋かなやの方に伸のびている城しろでした。浅瀬石川あせしを挟はさんだそれらの地域ちいきは、たくさんおほくの勇士ゆうしが戦いくさった古戦場こせんじやうであったのです。

「宇杭野合戦うくいのがっせん」の勝利しょうりで、政氏まさうじの領地りやうちは、お城しろのある浅瀬石あせしを中心ちゆうしんとして、ほぼ、奥山形おくやまがわ・中川なかがわ（黒石市くろし市内しよん）・高樋たかひ・垂柳たれやなぎ（田舎館村いんかかむら内うち）・黒石くろし上関分かみせき（宇和堰うわの南側みなみの辺へり）・浪岡なみのの内うち（北中野きたなかの）・外浜そとの内うち（青森あおもりの新城しんじやう・沖館おきだて）まで広がりました。そして浅瀬石あせしの城下しろも、多くの神社しんじややお寺てらが建たっていて、町家ちやうも七百軒しちひゃくけんという、為信ためのぶの堀越城ほりこしじやうと並ならぶほど隆盛りゆうせいになりました。

(三) 浅瀬石城の落城らくじょう

そのように栄さかえた浅瀬石城や城下町も、このときから十数年後には、最後のときが迫せまってくるのです。

《南部の総大将の名前は、長杭日向・下長杭日向守・名久井日向（時康）・下名久井日向守・名杭日向などと、同じ人なのですが、文書や資料によって違いがあります。お話では「名久井日向守」を用いました。

◇ 千徳大和守政氏の亡くなった年代は、天正十六年（一五五八年）に病死、或いは慶長けいちょうの始め浅瀬石落城のとき、とか。◇ 浅瀬石落城の年代は、慶長元

年（一五九六年）、或いは、慶長二年（一五九七年）とか。年代や戦いの場面、その他にも、関係内容が書かれている史書には、いろいろな違いが見られます。

しかし、遺族いぞくや討ち滅ほろぼされた浅瀬石側の人々にしてみれば、城主をはじめとして戦った人々の亡くなった年代や落城の年代など、間違まちがえることはないであろうという思いがします。そのことを考え、関係する年代や事柄ことがらは、地域に伝わる内容を重く見たお話、として受け止めてください。》

「宇杭野合戦うくいのがっせん」から一カ月ほどしてから、為信ためのぶは南方なんぶがたの田舎館城いなかだてじょうを

攻撃こうげきしました。政氏まさうじはそれに協力し、田舎館城いんきやうが滅んだ後に隠居いんきよしました。

浅瀬石城主あやせいしきを嫡男ちやくなんの千徳安芸守政保せんとくあきのかみまさやす（政康まさやす）に継つがせました。そして、天

正十六年（一五八五年）に亡くなりました。

やがて、津軽つがるの大部分を平定へいていした為信ためは、天正十八年（一五九〇年）に、

日本全国を統一するため小田原の北条氏を討伐とうばつにきていた豊臣秀吉公とよとみひてよしのと

ころに出向でむき、津軽つがる四万五千石（津軽全領域つがるぜんりやういき）の領主りやうしゆとして認めみとられまし

た。そして、津軽つがる為信ためと名乗ることになりました。そうなりますと、為信ために

とって、千徳家せんとくけは盟友めいゆうではなくて一家臣いちかしんということになるわけです。でも、

千徳家せんとくけは領地りやうちも広く津軽全領域せんとくけから見ても大きな存在そんざいになっていたので、

四万五千石だいみゆうの大名だいみゆうにおさまった為信ためは、文禄三年（一五九四年）、

千徳政保せんとくまさやすを堀越城ほりこしじやうに招き、千徳家の領地りやうちをこれまでより制限せいげんし、家来けらいの数

も百五十人までとして、残りのこりは為信ための城しろに移すように命めいじました。それを

聞いた政保まさやすは、怒いかりを抱いだいてことわりました。浅瀬石城主あやせいしきの政保まさやすとしては、

前まへに取り交かわした盟約めいやくによって、父ちちの政氏まさうじのころから為信ために協力きやうりきしてきた

こともあり、素直すなおに納得なつとくできなかつたのではないでしょうが。

為信ためと政保まさやすのあいだが險悪けんあくになってきて、政保まさやすは戦いくさいの準備じゆんびを始めまし

た。状況じやうきやうを見ていた為信ためは、慶長二年（一五九七年）二月、二千五百人く

らいの軍勢で浅瀬石城に攻めてきました。

為信は、政保の有力な家来を味方に招き入れていました。木村越後は、政氏にも仕えて数々の手柄を立てた功臣で、政保の有力な家来でしたが、主だった人たちが十数人と共に為信の味方となり、浅瀬石城に攻め込んで来たのでした。

浅瀬石側の兵は、以前より相当増えていましたし、懸命に戦って防ぎました。しかし、敵に味方して攻めて来た兵は浅瀬石城の様子をよく知っています。それに浅瀬石勢以上の大軍が相手です。一週間ほど激しい戦いが続くうちに、次々に討ち死にしていきました。そして、二月二十八日、浅瀬石城は火につつまれ、城主政保は十数人の家来と共に自ら命を絶ちました。

そのころ、家来の家五百三十戸。町人の家一千百三十戸。農家二百戸、ほどとなり、多くのお寺や神社も建っていて、とても栄えていたのですが、激しい戦いの場となって城も町もほとんど燃えてしまいました。

城主政保の父である大和守政氏も、この落城のときに亡くなったという史書も多いわけです。仮に、このときまで生きていたとしても、相当な高齢（「永正十年・一五一三年の誕生」と記されている資料も見られません。

それを基にした場合、八十五歳くらいで隠居の身になっていきますので、浅瀬石城の状況を変えることはできなかつたのではないでしようか。

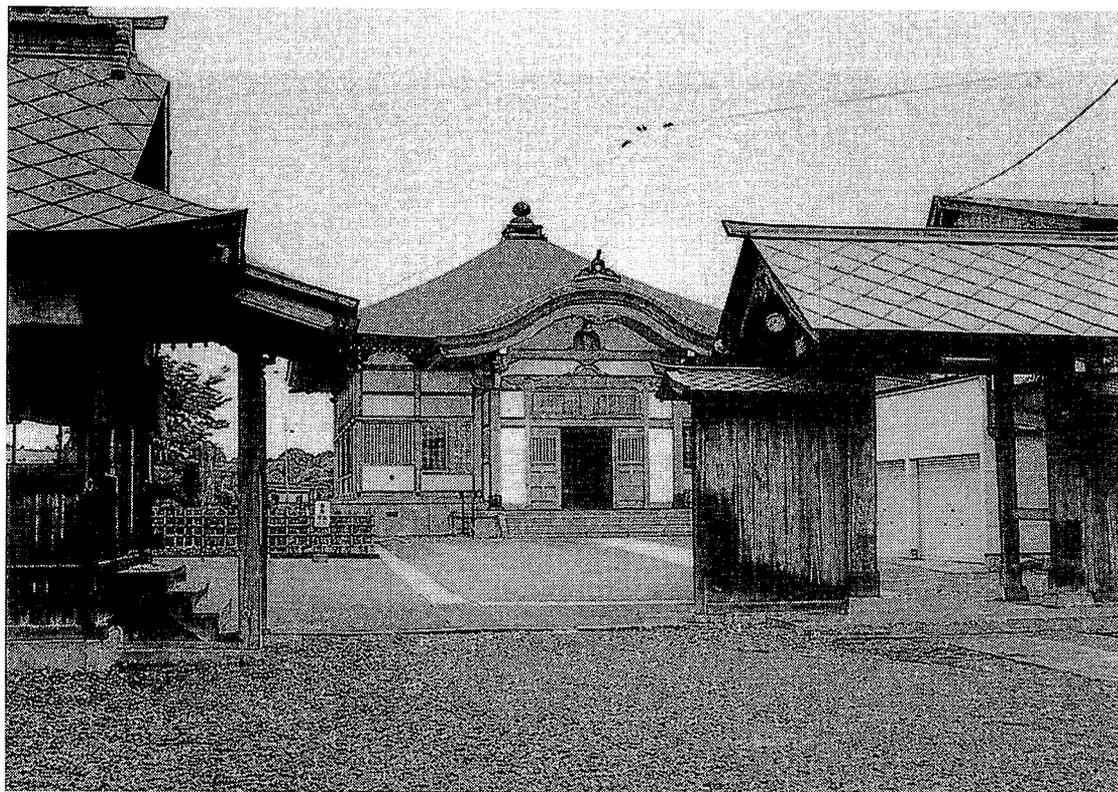
(四) 常縁和尚の哀話と「じよんから節」の発祥

常縁という和尚の哀しいお話が、この浅瀬石落城のときの忘れられないできごととして語り継がれています。

常縁は、千徳家の菩提寺である神宗寺（現在の長寿院）の住職でした。日に日に不利になっていく戦いの様子に心を痛め、仏前で浅瀬石勢（千徳家）の必勝を祈っていました。二十八日の朝、喚声をあげて攻め寄せて来た敵兵は、お寺の中に乱入して仏像や中にあるものをこわしてしまふ、という乱暴をはたらきました。また、千徳家の殿様たちの墓をあばいてこわしてしまふ、という兵も出て来ました。

これを見て、とてもそのままにしておけなくなつた常縁は、僧の身ではありましたが、すばやく山伏の姿に身を変えて、必死で敵兵と戦い追い払いました。そして、千徳家先祖代々の位牌と散らばっていた遺骨を拾い集めてまとめました。

そのうちに、また大勢の敵兵が押し寄せて来て常縁を取り囲みました。



現在の長寿院

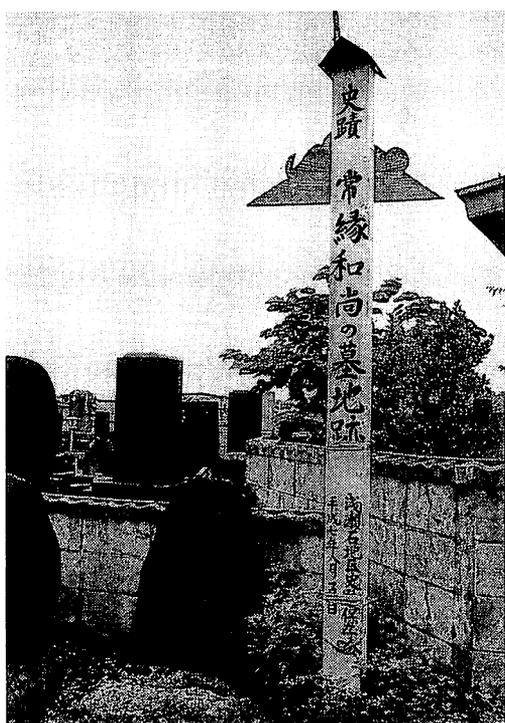
「この敵勢を打ち破ることはとても無理だ。しかし、大事な位牌と遺骨は、必ず、守りぬく。」と心を決めていた常縁は、それを身に付けて戦いながら、すきを見つけて東の方に逃げました。

敵兵はすぐ後を追ってきます。常縁は、場所を移動しながら大勢の敵兵と一人で戦い続けていましたが、浅瀬石川近くまで来たとき、ついに、捕らえられそうになってしまいました。

敵兵に追いつかれ、もはや、逃げることのできなくなつた常縁は、白岩の断崖に立つて、じっと濁流が渦巻いている川の深い淵を見つめました。そして、位牌や遺骨と共に、その淵へ身を投じたのでした。

人々は、この悲劇に胸をつよく打たれ、常縁に深い同情を寄せました。滅んだ主家





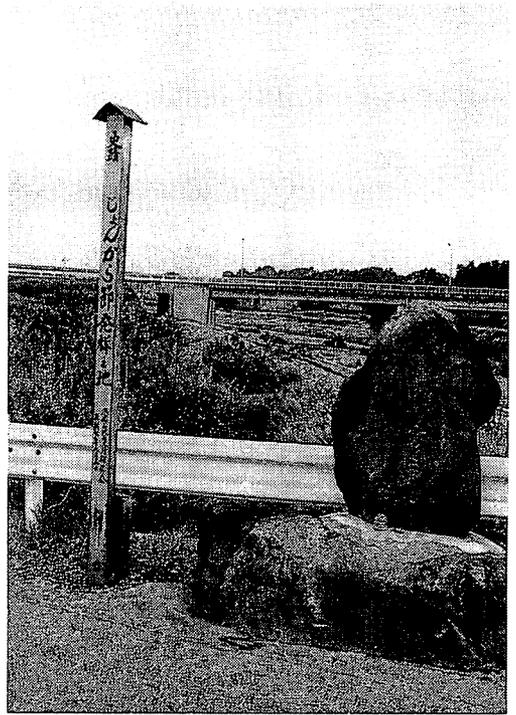
常縁和尚の墓地

(千徳家) を思う常縁の心があったからか、その後、何日たっても常縁の遺体も千徳家の位牌や遺骨も、人々の目につかなかったと言われています。月日が過ぎるうちに、常縁が沈んでいった深い淵もしだいに浅い流れに変わっていききました。

ある夏の日に、川原で無邪気に遊んでいた子どもたちが、砂の中から常縁和尚の変わり果てた遺体を見つけたのでした。子どもたちからそのことを告げられた村人たちは、相談して、その場所に常縁和尚の墓を作り、心を込めてお弔いをしました。そして、その場所の川原一帯を、村人たちは

「常縁川原」と名付けました。(その川原は、いつの間にか「上川原」となり「じよんから」と呼ばれるようになりました。)

城と城下町を焼かれ、わびしい暮らしをするようになつた村人たちは、お盆になると「常縁川原」に集まり、お墓にお供え物をして祈りました。そして、二度と戻って来ない昔を思い、その場で浮かんでくる言葉を歌にして盆踊りに添えたのでした。その歌は、昔の様子を



じよんから橋の手前に建っている
「じよんから節発祥之地」の碑
右下は上川原

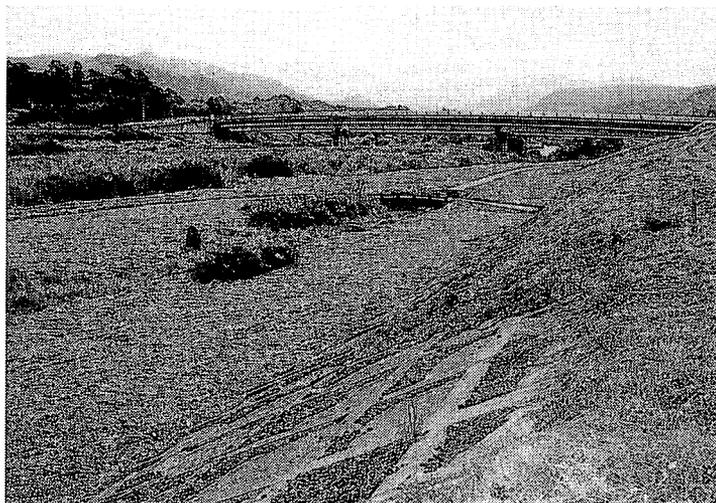
しのび、切々と嘆きを込めて歌われた
「口説き節」でした。

村人たちが寄り合ったときには、浅瀬石
が栄えたころや千徳家が滅んだ落城の様子、
常縁の身の上など語り合って悲しみにくれ
たり、自分たちの身の上を嘆いたりして、
それらのことをしんみりと口説いたことと
思います。

人々が寄り合って雑談などに夢中になることを「じよんからまかす」と言
うようになったそうです。

そればかりではなく、昔を思いしのだ身の上口説きとしての民謡
「口説き節」も、しぜんに生まれてきたのでした。村人たちが寄り合い、
しんみりと口説き語り合った内容や言葉も、お盆に「常縁川原」に集まっ
て歌われる「口説き節」として表現されたことと思います。

それが、「上川原節」とも言われた「じよんから節」です。「じよんか
ら節」は、「常縁の川原」にちなんだ「上川原節」。つまり、「常縁川原」



上川原と上の長い橋は「じょんから橋」

ということから発生したものの、と昔から伝えられてい
ます。そして、「じょんから節」^{ぶし}の最初のころの内容は、
千徳家と常縁のことを悲しみ、そして嘆いた「口説き」
でした。

そのような深い思いを持っている歌ですから、「じよ
んから節」が発生したころ、浅瀬石を治めていたお代官
は「穏やかでないものがある。」という理由で、歌うこ
とを禁じたときがあったそうです。そんなことがあって
も、歌は伝えられて来たわけです。

そのころの様子から考えてみると、公に歌うことがで
きず、ひそかに歌われていたこともあったと思います。

日々の暮らしの中にあって、村人の思いが連綿として生
き続けて来ていたこと。それが、「じょんから節」の発祥と歌い継がれて
いく過程となったのだと考えています。

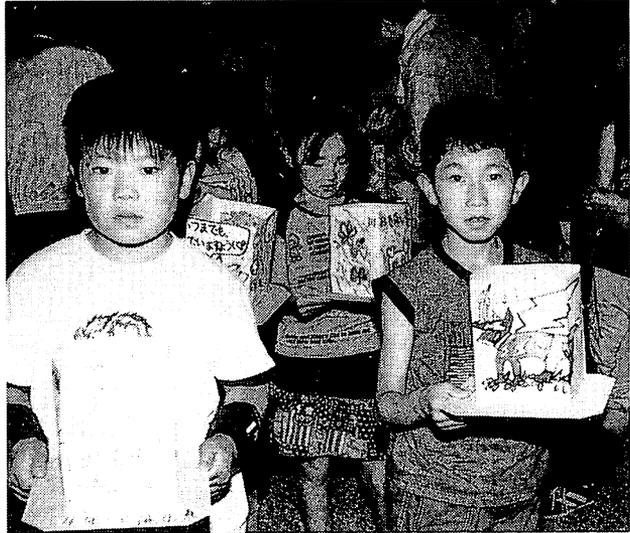
浅瀬石の「じょんから節」は、すぐ黒石に入って行き、それから津軽の
津々浦々まで伝わっていきました。



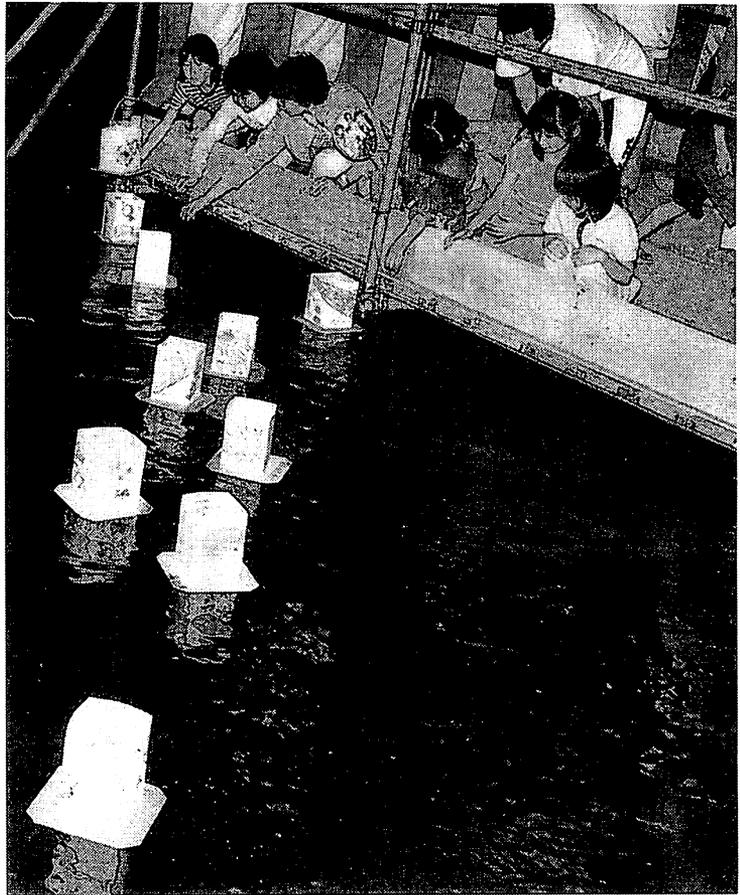
会場に集まった人々

(五)

灯籠流し
とうろう



子どもたちも、自分で書いた^{とうろう}灯籠を持ってきて参加



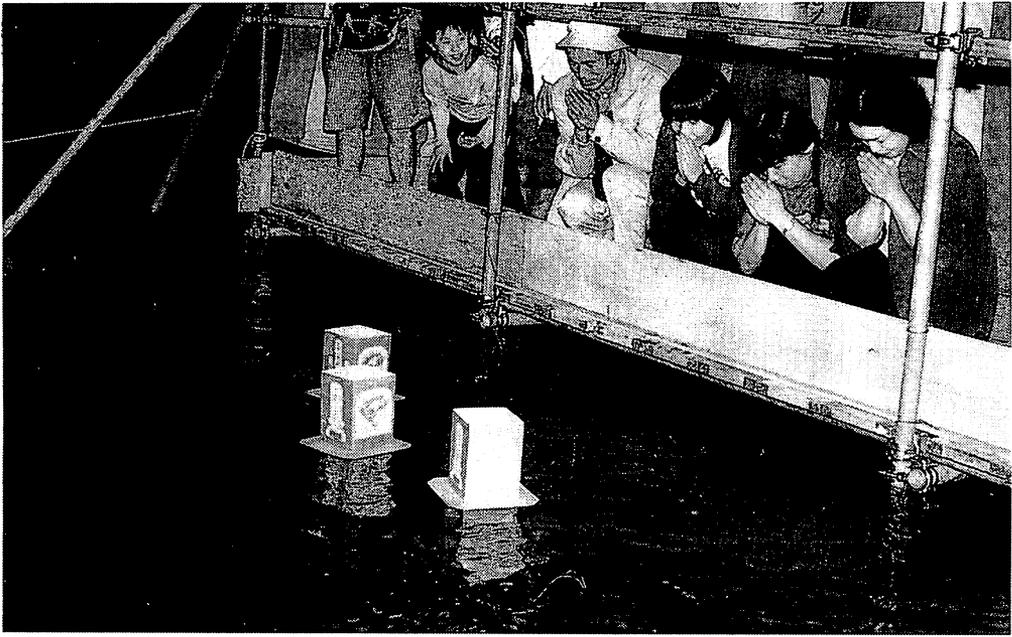
灯籠を流す子どもたち

浅瀬石地域にあるそれぞれの史跡しせきには、この土地に暮くらした人々の生き方と共に、忘れ難がたい物語が秘ひめられています。それが、「灯籠流しとうろう」の意味につながっていきます。

今年の「灯籠流し」は、浅瀬石地区の「じよんからふる里づくり推進協議すいしん会」の主催しゅさいで、八月十八日の夕方から行われました。浅瀬石城の落城四百年祭の時期じきから始まり、十七回めになります。

浅瀬石河川敷かせんしきのイベント会場には、地域六百戸の各家庭の人々が灯籠とうろうをもって家族ともども集まって来ました。浅瀬石小学校の子どもたちも、灯籠とうろうに自分の願いを記し、参加していました。弘前などの他市町村からの参加者も多く、会場に準備されている灯籠とうろうに必要なことを書き記しながら、

「何回も来ているのですよ。」



「思い・願い」を込めて、合掌がっしょう

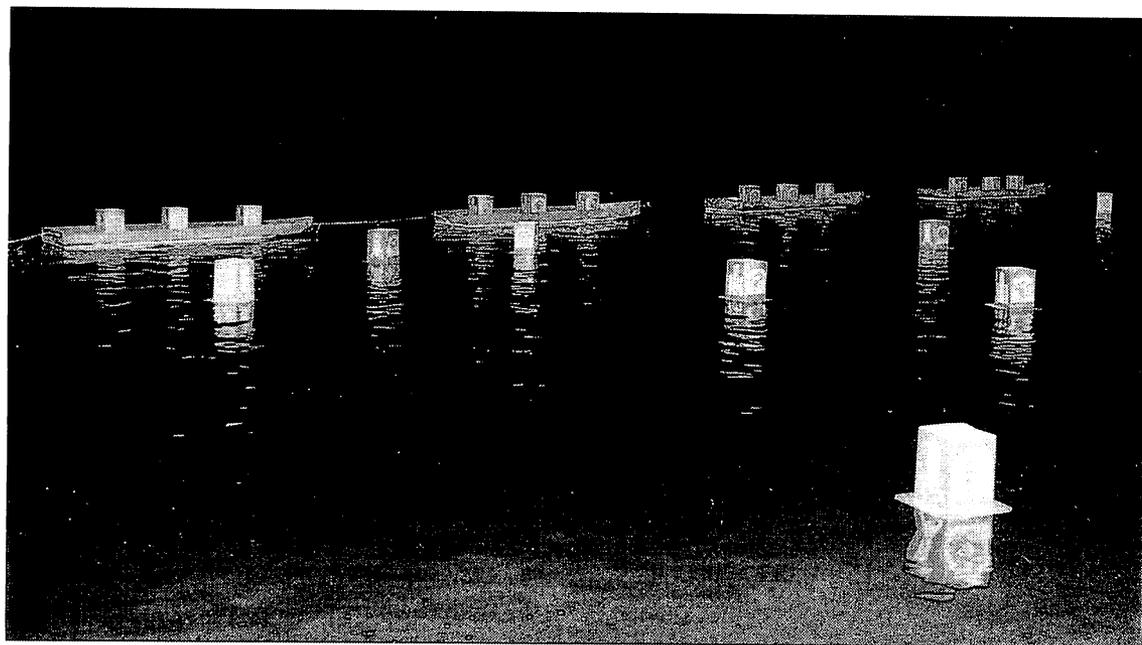
と言うほほ笑みが印象的いんしょうてきでした。

灯笼を流す前に、主催者しゅさいしゃから次のようなお話がありました。

「みんなで、千徳大和守政氏せんとくやまのかみまさうじ・千徳家と常縁和尚せんとくけ じょうえんおしょうの霊れい、そして村人たちの霊れいを思いやり、供養くよういたしまししょう。今、ここで暮らす私たち、先祖のありがたさを忘れず、生活の健やかすこさを合わせて祈り、お盆をなごやかに過ごしまししょう。」

集まった人たちは、長寿院住職のお経ちようじゆいんじゆうしよく きやうが始まると、それに合わせて次々に灯笼とうろうを水面に差し、流れに漂ただよって離れて行く灯笼とうろうを見送りながら合掌がっしょうし、先祖の霊れいを慰なぐさめていました。自分の願いも、それぞれ込められていたことと思います。

柔らかな火を灯した灯笼とうろうが、暗い水面に姿を映して連なり、さざ波の動きにさそわれて、ゆるやかに流れていきました。



へハア—さあさこれから読み上げます

津軽浅瀬石じよんから節よ さてはあわれな落城ばなし

へハア—いまは昔の七百余年

南部重行城主となりて 伝え伝えて十と二代

へハア—ころは慶長二年の春に

津軽為信大軍ひきい 城主政保討ち死にいたす

へハア—時に辻堂常縁和尚

先祖代々位牌をせおい 高いがけから濁流めがけ

へハア—やがて春すぎま夏となりて

村の子どもら水あびすれば 砂の中から哀れな姿

へハア—村の人たち手厚く葬り

盆の供養すましたあとは 昔しのでじよんから節よ

「明治四十年（一九〇七年）ころ、八十歳くらいになる村人がよく歌った歌詞」

（「浅瀬石の『灯笼流し』」の執筆者

三 上 英 治）



黒石のこみせ通り

五 こみせ祭り

(一) 「こみせ」って何？——「こみせ」の歴史——

下の写真を見て下さい。

丸い輪わが見えますが、これは何に使う物でしょう。

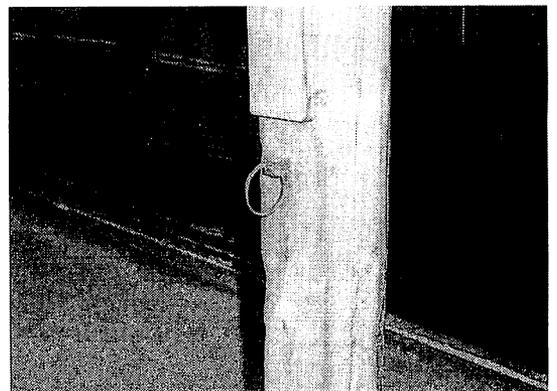
これは、昔、村々から米や木炭などをつんできた馬や、馬を引いて商店に売り買いに

来た人たちが、馬のたずなをつなぐための金具です。

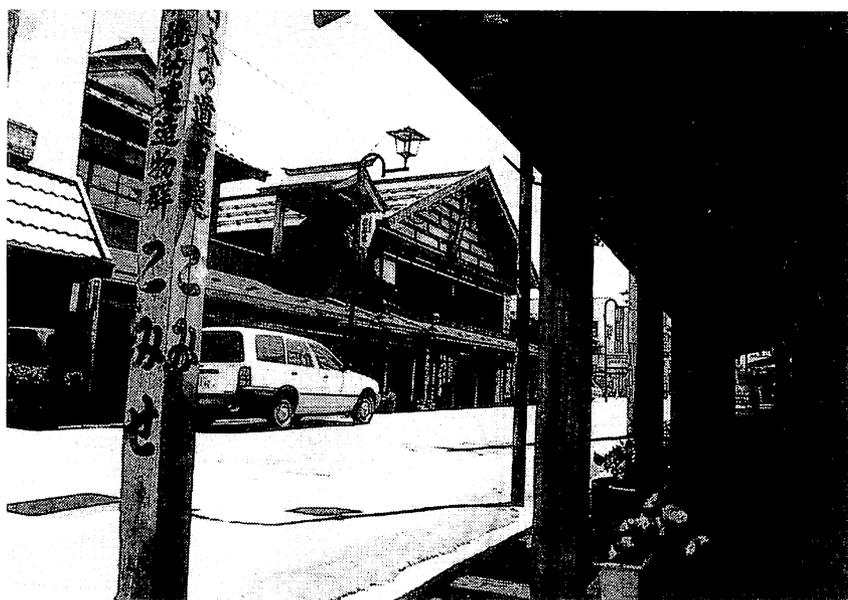
名前を「さつなぎ」といいます。その昔、馬や荷車が行き交い、人々にぎわるこみせが目に浮うかびますね。

「こみせ」とは商店街がいの通りに張り出した木造もくぞうのアーケードのことをいいます。

「こみせ」はどこから来たのでしょうか。定かではありませんが、新潟県上越市高田地区には、「こみせ」に似たような「雁木がんぎ」とよばれるものがあり、ここが



さつなぎ



日本の道百選「こみせ」の表示

発祥地ではないかといわれています。

二百二十年前（江戸時代）ごろには、黒石の多くの場所にありました。黒石市中町のこみせは、一つの町内にまとまった形で旧家と共にあるのは、国内でも珍しく、貴重な存在になっています。

「こみせ」の長く出た「のき」は、夏の暑い日差しや雨をさえぎり、冬には吹雪と寒さから歩行者を守り、人々は安心して通ることができました。

中町地区にある「こみせ」の一部には、今でも、積もった雪が入ってこないように「葺」といわれる木製の「落とし板」が見られます。お客さんのことを考えて作られた建物は、やさしく、あたたかい雰囲気があり、江戸時代の人々の工夫や生活の知恵が感じられます。

(二) 「こみせ祭り」への願い

今から十七年前の一九八六年九月三日から四日まで第一回目の「黒石こみせ祭り」がこみせ祭り実行委員会的主催でおこなわれました。

黒石 秋の津軽の伝統と技
こみせまつり

津軽む・かかろ前かるたまり
津軽三味線・大カキモチ
お盆か・お盆のワッパ
クラシックカー展示・カキモチ試乗会
消防団競演の等々……
今年もこみせまつりは
2日間とも行事が盛りだくさん

期日
平成15年9月
13日(土) 10時～15時
14日(日) 9時～15時

場所：黒石市中町・前町
主催／黒石こみせまつり実行委員会
後援／黒石市・黒石商工会議所・黒石観光協会
こみせまつり会館・黒石同窓会・黒石同窓会
津軽こみせ祭・黒石同窓会同好会
黒石青年会・黒石青年会

黒石商工会議所 黒石市黒石町内 電話(02)4310

当日は雨になりましたが、こみせのおかげで、楽しい祭りになったそうです。

黒石商工会議所の三上さんは、

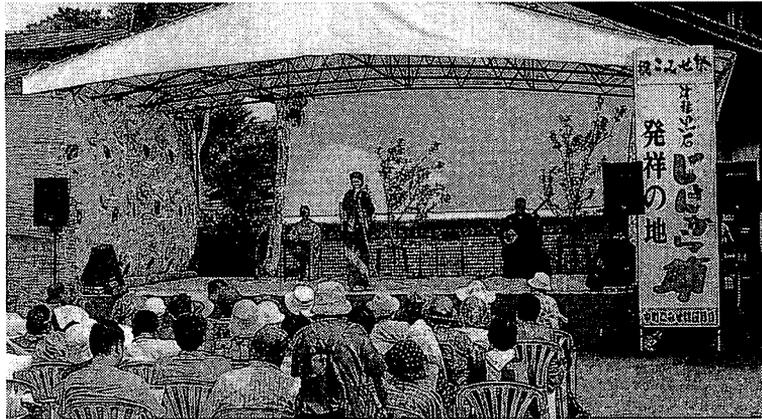
「黒石をアピールしようという情熱が、祭りを成功に導きました。あれから十七年経った今も、その気持ちを忘れずに祭りに取り組んでいます。」と話していました。

(三) 発展する「こみせ祭り」

人々に親しまれてきた「こみせ祭り」は、現在では秋と冬の二回開催しています。こみせの情緒を大切にしながら、毎年、たくさん新たな企画を考えています。

◆秋のこみせ祭り

津軽太鼓フェスティバルも行っています。和太鼓の音がこみせの町並みに響き、江戸情緒をかもしだします。



つがるみんよう
津軽民謡や三味線などの演奏も積極的せつきよくてきに組み入れています。また、火の
みやぐら
見櫓写真展やクラシックカーの展示、人力車体験コーナーなど、楽しいイ
ベントが盛りだくさんです。

ライトアップし、情緒豊かな演出を行いました。冬には消防の観閲式のみとい振りを行いました。こみせの雰囲気にはピッタリ合っていますね。

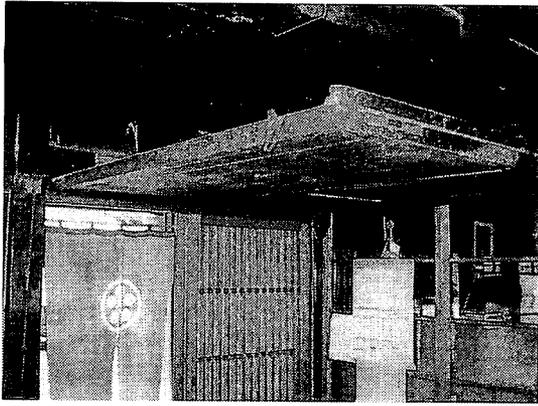
この祭りがきっかけで、こみせを文化的遺産として残すべきだという意見が高まってきました。文化庁の伝統的建造物群の指定を受けると、助成金を受けることができ、今まで以上に建物を保護・維持することができ、多くの観光客が来てくれることにもなり、一層黒石の活性化を図ることができるとしよう。」と話していました。

(四) 「こみせ祭り」を大事に考える人々の思い

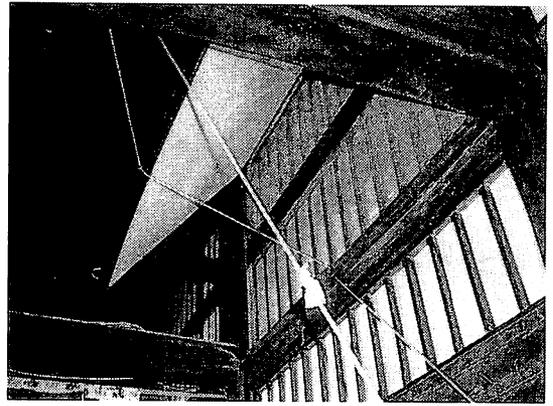
「こみせ祭り」は多くの人々の手によって支えられてきましたし、さらに発展させていきたいと願っています。今回はその人々の中から、三人の方の思いを紹介します。

① こみせの伝統を守る——高橋幸江さん——

高橋家住宅は二百五十年間という長い間、ほとんど変わることなく、現在まで維持している貴重な住まいです。独特の特徴的な建築様式を長期に保存しているところから、昭和四十八年二月に国の重要文化財の指定を



つり上げ式大戸



つり上げ式障子戸

受け、こみせの中でも象徴的な存在になっ
ています。そして、次のような工夫も見
られます。

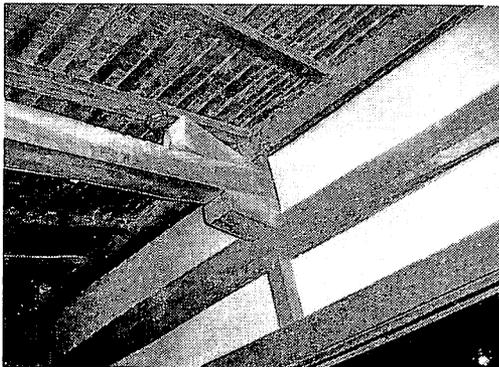
・「つり上げ式の障子戸」——風を取り
入れたり逃がしたりする戸です。今の
換気扇のような役割をします。夏でも涼
しいそうです。

・「つり上げ式大戸」——のれんを下げ
た後、この戸を降ろしました。今のシャツ
ターです。

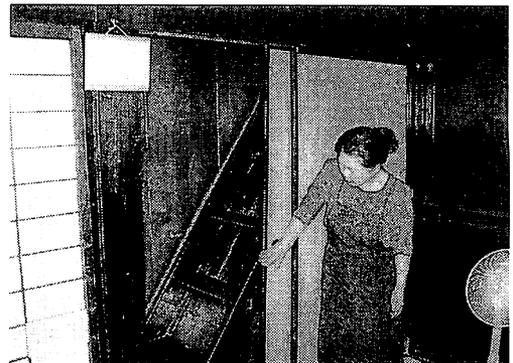
・「隠し階段」もあります。

・「やじろう組み」——木を左右からや
じろべえのように組んだ梁です。

十四代目当主の高橋幸江さんは、
「今でもこの家で普段通りに生活して
います。不便さも感じません。先代が生
活していたことを考えると愛着と一体感



やじろう組み



かくし階段



鳴海文四郎さん



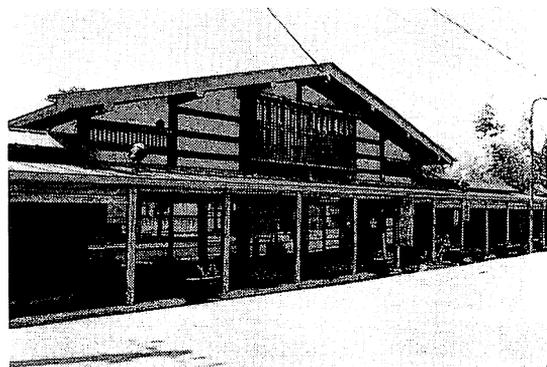
高橋幸江さん

を感じます。貴重な文化財産でもあるので、大切に守っています。」と話していました。

「『黒石っていい町ですね』、『また来たいわ』といわれることが一番うれし
いんです。今は『こみせ保存会』という会
を作り、市民ぐるみでアピールしていま
す。これからもいろいろなアイデアを考
えています。昔の着物姿で歩くようなイ
ベントもすてきですね。」
と、高橋さんは瞳を輝かせていました。

②こみせの活性化をめざす—鳴海文四郎さん—

鳴海酒造は平成十四年四月、黒石市指定有形文化財の指定を受
けました。町おこしの一環として鳴海さんは江戸時代の建物を守
り、残していくための伝統的建造物群の指定に向けて努力をして
います。鳴海さんは、



高橋家



渋谷幸平さん

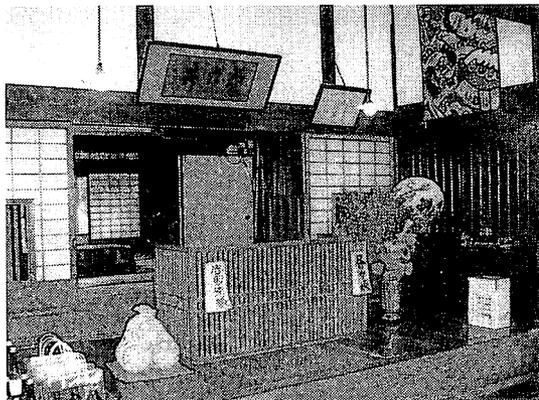
「こみせという貴重な観光資源を活用し、町を活性化したいと考えています。この指定を受けます。この指定を受けると、いっそうこみせを発展させることができず。もっとたくさんの人々がこみせを訪れるよう努力します。」

と力強く話してくれました。

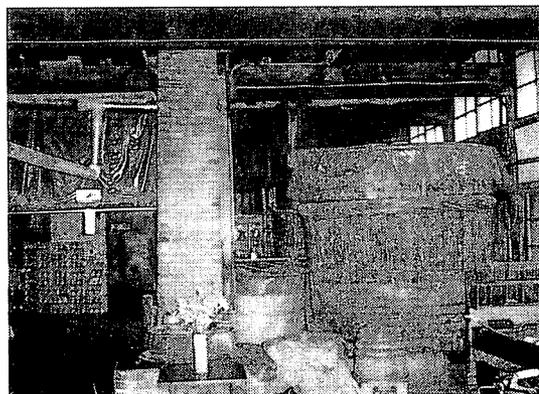
③「こみせ」の心を伝える——渋谷幸平さん——

九歳から三味線に興味を持ち、こつこつと練習を始めた渋谷幸平さんは、今では、津軽三味線奏者の第一人者です。

現在は、津軽こみせ株式会社社員として、「こみせ」で三味線ライブを行っています。こみせ祭りやいろいろなイベントで演奏し、津軽三味線の魅力を多くの人に伝えていきます。



昔の雰囲気を感じられる入口付近



お酒がつけられている場所の一部

「こみせ」と三味線の音はとてもよく合います。「こみせ」を訪れたお客様は、最高レベルの演奏に心躍り、昔のこみせの様子に想いをはせます。

渋谷さんは、

「こみせに三味線の音を響かすことが自分の使命だと考えています。沖繩の三線奏者と出会い、ハーモニを奏でたこともいい経験でした。お客さんとの出会いを大切にしながら、自分を成長させることが大切だと思っています。」

自分もこみせで演奏するのが大好きです。演奏しているときはこみせのことを思い描きながら弾いています。

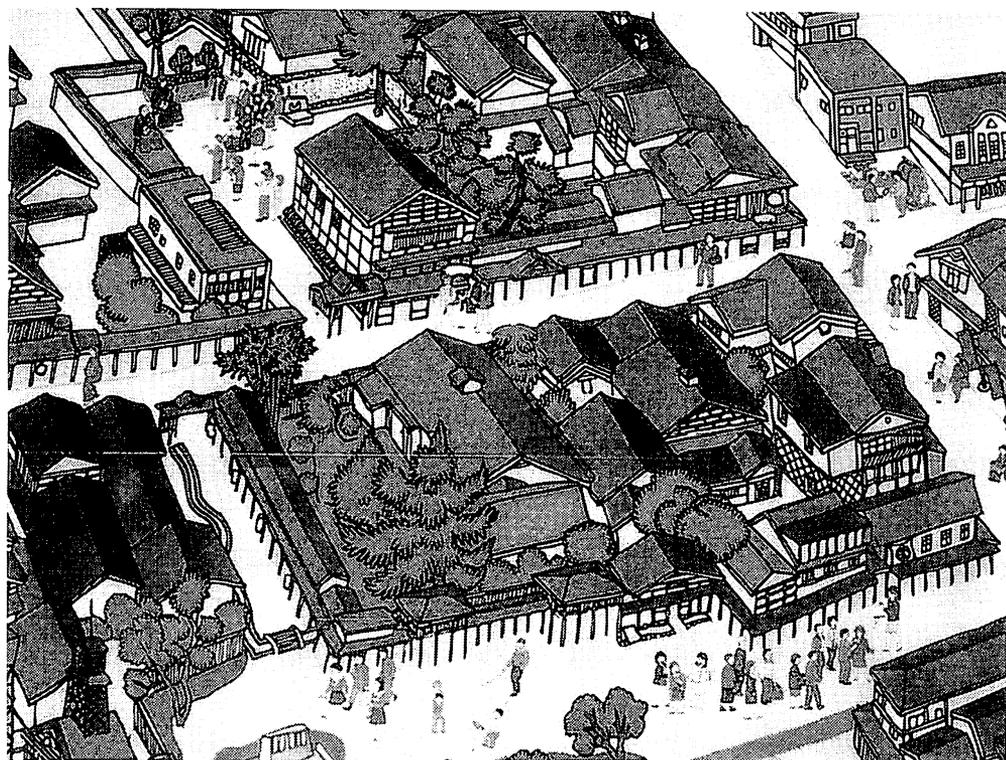
これからも三味線を通して、こみせを全国に発信したいと考えています。」と、その思いを語ってくれました。

「こみせ」に生きた私達の先祖の心や、貴重な文化遺産のすばらしさを、広く伝えようとする情熱が感じられます。

渋谷さんはお弟子さんや三味線講習会に参加している人々にも、自分の演奏技術と気持ちを伝えていきます。

今後、こみせから新しい文化が広がっていくことでしょう。

渋谷幸平 昭和五十六年四月九日生まれ



こみせ駅に掲示している将来の「こみせ」

平成十三年度津軽三味線全国大会A級四位入賞

(五) 「こみせ」の夢—これからの「こみせ」—

津軽こみせ株式会社では、将来の「こみせ」を思い描いています。みなさんは、こみせ駅に掲示している「黒石みらい物語」を目にしたことがありますか？

江戸時代の情緒が残る「こみせ」には、たくさんの観光客が行き交い、にぎやかな人々の声と三味線が聞こえてきそうです。

古き良きものを守り、育てると共に、新しい文化の創造と発信に夢がふくらみます。

(「五 こみせ祭り」の執筆者 阿部 誠)

六 雪だるまの里・黒石

(一) 新しい行事の誕生^{たんじょう}

黒石市は歴史のある古い町が多いので、伝統のある魅力的な行事がたくさんあります。たとえば、ネプタまつり、黒石よされまつり、大川原の火流し、などの行事が有名です。これらの行事は由緒謂れが古く、すぐれた民俗行事として数百年以前から続けられてきました。そのため県内はもとより、県外にも知られていてそのシーズンになると多くの観光客が見物にやってきました。もちろん一番はりきるのは地元の人です。地域の誇りと日頃のエネルギーを、この時とばかりに集中させ熱気と興奮の時を過ごします。こうして伝統行事は若い人へと受け継がれ、黒石市民のけっそく力と生活意欲を高めてきました。

そして、新しい行事も誕生しました。それが、二〇〇〇年（平成十二年）から始められた「雪だるまの里・黒石」という雪祭り行事です。雪だるまをたくさん作ることに、ユニークな雪だるまを作ること为目标に始められました。

この新しい行事はたちまちにして共感を呼び、ついに二〇〇二年には大



きさで「日本一の雪だるま」を達成することができました。

(二) 「雪だるまの里」誕生まで

新しい行事ができるためには次のような条件と要素が必要です。

- 良いきっかけとタイミング。
- 多くの市民から賛同される。
- 一時的なものでなく長く続きそうである。

「雪だるまの里」の新しい行事は三つの条件を見事にクリアしました。

最初に提案したのは黒石商工会議所の方々です。

きっかけは紀元二十世紀から二十一世紀になる時期でした。二〇〇〇年は二十世紀の最後で世紀末と言われ、二〇〇一

年は二十一世紀の最初で新世紀しんせいと言われました。

百年に一度、世紀の移り変わるこの機会は、とてもよいタイミングでした。長い冬の期間をじっと耐たえる雪国の地方の人々は、ともすれば冬をマイナスのイメージで考えます。「雪だるまの里・黒石」は雪をプラス思考しこうでとらえ、冬を元気に乗りきる気持ちに切りかえるようにしたのです。後ろ向きから前向きへ、短所を長所に変える発想はっそうの転換てんかんでした。

《商工会議所》市の商業と工業を發展させることによって、産業面でも経済面でも活力がでて市全体の生活が向上するように努力する団体です。どこの市町村にもあり地域の企業きぎょうや商店が加盟かめいしています。

商工会はさっそく行動を起こすと同時に、市民に呼びかけました。良い考えはみんなに受け入れられます。行政ぎょうせい（市役所）も市民も、官民あげて協力したので雪だるま行事は二、三年のうちに広がりました。

二〇〇二年、二〇〇三年の冬は黒石市内は家庭、学校、商店、職





場などで雪だるま作りが盛んになりました。そして、町中いたる所にユニークで楽しい姿の雪だるまが立ちならぶようになりました。新行事が定着してきたのです。

(三) 日本一の雪だるま完成

活気ある市民行事として定着した「雪だるまの里」は、たちまちにして全国的に有名になりました。その代表が日本一大きい雪だるまの完成です。二〇〇二年二月二十一日、ついに日本一の雪だるまが完成しました。場所は、最も雪深い所がよいということで、黒石市沖揚平に作りました。

雪だるまの高さは三十一メートルを超えました。それまでの日本一雪だるまは山形県大蔵村おおくらの二十九メートルでした。これを約二メートル上まわる名実ともに日本一の雪だるまが堂々完成したのです。

これだけ大きな雪だるまですので、使った雪の量や、目、口、鼻などに使った材料は大変なものでした。材料は、できるだけ地元や郷土の特徴を生かすように工夫し、りんご、にんじん、ほたて貝などを使いました。雪だるまを作っている期間中、マスコミの報道が



連日「今日は何メートルの高さになった」と伝えました。そのため、関心は一段と高まったのです。

完成すると製作関係者と多くの市民は盛大なセレモニーを行なってお祝いしました。それからの数日間は、黒石市民や県内外の各地からたくさん
の見物人が訪れました。二月という冬の真っ最中に、雪深い沖揚平の地に
数百人、千人単位の多くの人が訪れたのは初めてのことでした。「日本一
の雪だるま」が、たくさんの人々を引きつける魅力と人気があったことの
証明です。

《日本一の雪だるまの資料》

記録達成日 平成十四年二月二十一日

高さ 三十一・四二五メートル

横はば 五十メートル

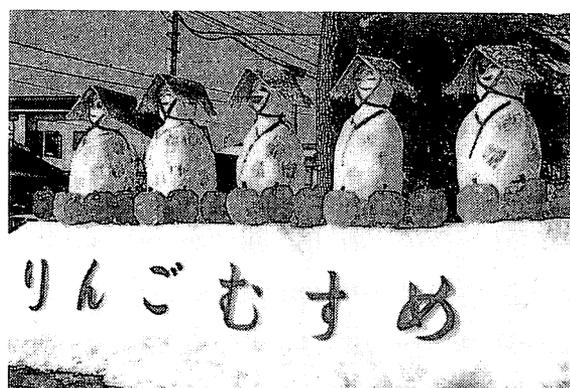
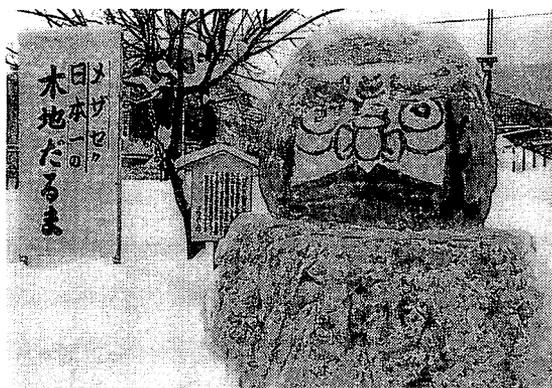
雪の量 五万立方メートル（大型ダンプ一万台分）

製作日数 二十日

《顔の特徴と材料》

目

陸奥湾産ほたて貝四百枚



鼻 青森県産ひば材

口 黒石産りんご二百個

ほほ 直径一メートルの黒石産紅もち

眉^{まゆ} りんごの木原料の木炭^{もくたん}五キロ

首飾り 沖揚平産にんじん十キロ

(四) 一万個の雪だるま

日本一の雪だるまとともに注目されたのが、作った雪だるまの数
の多いことです。二〇〇〇年の冬には、二十世紀最後にちなんで
「二〇〇〇個の雪だるま」を作ることが目標として掲げ^{かか}られました。
目標を達成^{たっせい}するために、商工会が中心となって「津軽くろいし日
本一の雪だるま実行委員会」が組織されました。市、観光協会、各
種団体も応援し市民全体に強く呼びかけました。その結果、目標の
数を大きく超えて二千五百個以上の雪だるまが作られました。

翌年の二〇〇一年の冬には六千個をこえました。二〇〇二年の冬
は一万個にあと一息という数の雪だるまが作られました。

黒石市は人口が約四万人で、世帯数^{せたい}が約一万二千戸です。ですか



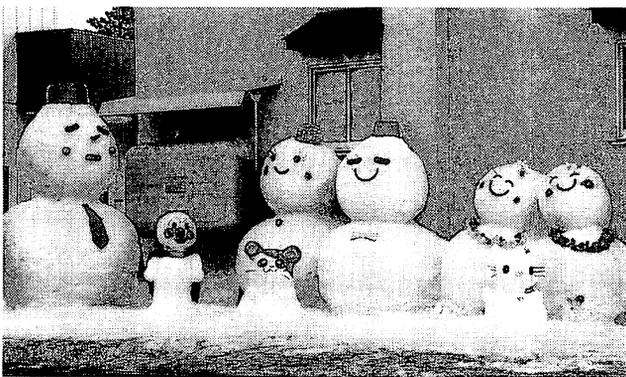
ら、世帯数に近い数の雪だるまが作られたことになります。黒石市内の家庭、職場、商店、学校など市民総ぐるみ参加の雪だるま作りが実現したのです。

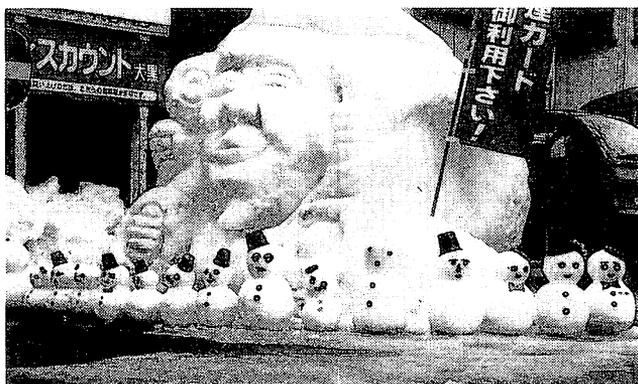
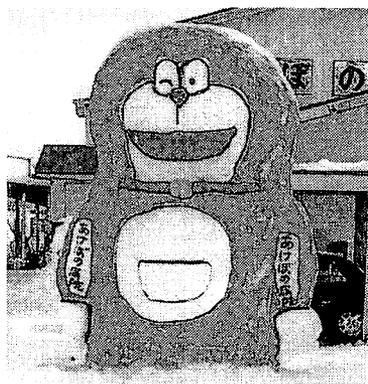
このころ、黒石市内を歩いてみると、さまざまな形のユニークな雪だるまが立ちならんでいました。昔からおなじみのオーソドックスな形のもの、ドラえもんやアンパンマンなど子ども向けのもの、動物、こけし、お地蔵じぞうさんからの、汽車などの乗物まで個性たっぷりです。

ある家の前では、元気なお年よりのおばさんが、二人で形の良い雪だるまをていねいに作っていました。近所どうしの仲良しだそうです。

「毎日少しずつ出来上がっていくのが楽しくて。」と笑顔で話していました。

交番こうばんの前には、お巡りさんの帽子をかぶった雪だるま。お店の前にはお客を招いている雪だるま。駅前広場には大勢が集合している雪だるま。この





期間中、黒石市内の人口が雪だるまの
数だけ増えたようなにぎやかさです。

こうして、「雪だるまの里・黒石」

という新しい行事は数年のうちに定着

しました。次の目標は四万個の雪だる

まです。この数字も近いうちに達成さ

れることでしよう。

寒くて雪の多い暗いイメージの冬を、

楽しく元気に明るく過ごしたいという

気持ち^{てんとう}が市民全体のものになったのです。

こうして、古くて伝統のある黒石市に、新しい市民総ぐるみの

活力ある冬のお祭り行事が加わりました。

(「雪だるまの里・黒石」の執筆者 山野井 昌 関)



七りんご祭り



九月、大きな箱にいっぱいのにりんご。
いせいのいい声が会場のスポカルイン黒石に
響ひびいています。

秋しゅうかくの収穫ととの喜びよろこがあふれています。

黒石りんご祭りは、今年で十三回目を迎むかえます。
訪おとずれる人は平均へいきんで約一三〇〇〇人にも上り、
りんご産地さんちで有名な黒石市にとって、人気もよおの催もよお
しになっています。

平成三年、台風十九号は青森県を直撃ちよくげきし、市
内のりんご農園にも大きな被害ひがいを与あたえました。

その時、市民しみんが復興ふっこうに協力きょうりょくをしてくれたことか
ら、お礼返しれいがしをしようと、商工会議所しょうこうかいの青年部
が中心しんとなって始めたのがこの行事こうじだそうです。
市内しんの多くのりんご農家のうかや商店しょうてんが参加さんかし、取
れ立てしんせんの新鮮しんせんでおいしいりんごを安く売うりました。

た。贈答用としても喜ばれました。

現在では、「りんごを中心とした町づくりと総合的な産業文化の発展を図る」という目標を立てて、大きな祭りにしました。

収穫に感謝をして、りんごの格安販売を行ったり、市民が参加してたくさんイベントを行ったりしています。

「黒石りんごまつり実行委員会」では、五つの部会が中心になって祭りの内容を決めています。

- ・りんご市部会（りんご販売）
- ・ふるさと産業展部会（物産協会黒石商店会）
- ・収穫感謝祭部会（農協、農産物品評会、イベント）
- ・りんご城部会（ステージイベント、アーリーナ展示物）
- ・健康づくり市民の集い部会

黒石市役所の商工観光課の宮本さんは、

「各部会が協力して、毎年新しい事業を考え、祭りを盛り上げています。昨年は宮古市とのタイアップで、さけのつかみどりをしたり、りんごそ





ばの販売はんばいを行いったりしましました。とても好こう評ひょうでした。りんご販はん売ばいでは家か庭てい用

としてだけだけでなく、県けん内ない外がいへの贈ぞう答とう品ひんとしても喜よろこばれています。たたくさんの皆みなさんに実みりの秋あきを味あじわわつて頂いただいたいと思おもいます。皆みなさんも一い度どおおいいで下ください。」

と話わしていました。

收しゅう穫かくを市し民みんと共ともに喜よろこび、多たくの人ひと々が集つどう黒くろ石いしりんご祭まつりは、黒くろ石いし市しの産さん業ぎょう文ぶん化かのリーダりーだー役やくとして、今いま後ごも注ちゅう目めさされることことでしょう。

（「七りんご祭り」の執筆者 阿部 誠）

◇活用した本や資料

- ・唄と踊りの祭典 黒石よされ五百年の軌跡 石澤清三郎著（平成十年十月発刊）
- ・黒石市観光基本計画 発行黒石市（平成八年三月発刊）
- ・津軽ねぶた論攷黒石《分銅組若者日記》解 発行社会法人黒石青年会議所（平成七年五月発刊）
- ・青森県百科事典 発行東奥日報社（昭和五十六年三月発刊）
- ・新津軽風土記わがふるさと（三）発行北方新社 船水清著（昭和五十五年十二月発刊）
- ・黒石市史通史編（I・II）発行黒石市（昭和六十二年十一月・昭和六十三年十二月発刊）
- ・浅瀬石川郷土志 発行歴史図書社佐藤雨山・工藤親作著（昭和五十一年四月三十日発刊）
- ・福寿草 発行大川原小学校創立百周年記念事業協賛会（平成四年十二月発刊）
- ・学校文集第三十三号ふくじゅそう 発行黒石市立大川原小学校（平成十一年三月発刊）
- ・黒石地方の城館 発行黒石市教育委員会文化課（平成十二年三月発刊）
- ・津軽の祭り 発行北の街社 船水清ほか著（昭和五十八年八月発刊）
- ・常住不滅 発行浅瀬石城落城四百年記念事業協賛会（平成九年八月発刊）
- ・記録集「大川原のルーツを訪ねて」執筆 黒石市教育委員会文化課岡崎正憲
- ・新聞掲載写真 津軽新報社
- ・黒石市史略年表 発行黒石市黒石市教育委員会文化課編（昭和五十九年八月発刊）
- ・黒石地方誌 発行富士書店佐藤雨山・福士国四郎著（昭和四十八年五月発刊）
- ・黒石の小見世について 発行黒石商工会議所鳴海静蔵著（平成四年四月）
- ・「雪だるまの里」資料提供 黒石商工会議所

あとがき

編集委員長 三上英治

「わたしたちの黒石」を編集執筆するときには、実際の取材活動とともに、編集委員が所有している本や資料のほかに、多くの文献や資料が必要になります。今回も黒石市教育委員会文化課のご配慮でそれらを活用することができました。また、編集委員各自の取材では、民俗行事・お祭りの関係者の方々や観光協会の方々から、とても親切な協力をいただきました。合わせて厚くお礼申し上げます。

黒石の「民俗行事やお祭り」は、市内各地域で実施されているものを含めますと相当な数になりますが、今回はその中から、大川原の「火流し」・ねぶた祭り・黒石よされ・浅瀬石の「灯笼流し」・こみせ祭り・「雪だるまの里・黒石」の行事・りんご祭り、を選んで編集しました。それらは毎年繰り返されて行われています。いずれもその地域の暮らしの歩み、気候・自然環境や産業の特色、地域に住む人々生活やならわしと密接に結び付いています。

行われている民俗行事やお祭りによっては、成り立ちの過程が明確でない面もあります。今後、それがしだいにわかり、実施していく意味がさらに深く理解され受け継がれていくことも大事なことと思います。それと共に、長い歴史の間に人々の生活に溶け込んできていますから、行事を続けそれを楽しみ、心にする里を育む人や、心のふる里として足を運ぶ日を待っている人も多いわけです。それは、起源や成り立っていく様子などにかかわらず、人々の生活感情の中に根強く生きていて、学問的な理由付けを越えるものだと思います。そのことを、より大事にしていきたいものと考えています。

紹介した内容の中で、同じ民俗行事やお祭りであっても昔と変わって来ているところについても述べました。時代の移り変わりにしたがって人々の生活が変化してき、行事の仕方に反映していきます。また、観光・産業の振興、地域の活性を図りたいという大事な視点で、新しい形の行事や祭りも生まれてきています。これも長い歴史からみれば、より良い生活をめざした変化の一つであると思います。いずれにしても、私たち自身につながる郷土の大事な歩みであると言えるでしょう。

子どもたちの参加の様子についても述べました。子どもたちが、自分の

住んでいる地域の人々と一緒いっしょになって活動することは、行事の意味を理解りかいすることだけにとどまらず、人々の思いを考えたり、つき合い方を自身で感じ取っていったり、という望ましい資質ししつが養やしなわれて行くことにつながっていきます。

取材をし、写真撮影さつえいをしていく場で、人々と楽しくお話することができました。そして、民俗行事みんぞく・お祭りの大事な意味は、開催場面かいさいの生き生きとした躍動やくどうの中にも、思いを入れた静かな動作どうさの中にもあり、さらには、いろいろな準備をしていく作業さぎょうの過程かていにもすでに存在そんざいしている、ということとを再確認さいかくにんできました。

昔むかしから伝統でんとう的に継けい続ぞくされているもの、新しく生まれてきたもの、共にその地域どくとく独特の色あいや心が込こめられており、その地域の貴重きちょうな文化遺産いさんだと思おもいます。

以上のことを含ふくめて、この第三集の内容が、皆さんの郷土きょうとについての理解りかいを深めていく一因いちんとなれば幸いに思おもいます。そして、郷土きょうとに誇ほこりを抱いだき、住みよい地域づくりをしよう、という思いや行動が育つことを願ねがっています。それが、この「わたしたちの黒石—第三集『黒石の民俗行事やお祭り』」を編集へんしゅうした主旨しゅしです。

黒石市民財団ふる里読本編集委員会

編集委員長 三上英治

副委員長 葛西正勝

委員 田澤郁夫

委員 山野井昌関

委員 須藤重昭

委員 阿部誠

ふる里読本「わたしたちの黒石」

第三集

「黒石の民俗行事やお祭り」

発行 平成十五年九月二十九日

発行者 財団法人 黒石市民財団

佐藤 義弘

事務局

青森県黒石市大字市ノ町五番地二号

電話 〇一七二(五三) 三七七七

對馬省次

印刷所 株式会社 津軽新報社

青森県黒石市前町四十八番地

電話 〇一七二(五二) 三一九一



財団法人 黒石市民財団